

湾岸戦争とマサチューセッツ湾岸植民地の 「荒野への使命」

大西直樹

1991年年頭に勃発した湾岸戦争に関してその戦いを勝利した当時のブッシュ大統領は、同年1月29日の一般教書演説で誇らしげに次のように述べている。「米国はまさにこの努力を指導する主要な役割を担っている。世界の中で、米国だけがよって立つ倫理と、それを支える資源を持ち続けてきた。世界中でわが国だけが、平和のために軍を束ねることができる。これが指導するものの責任であり、米国を、世界が探し求めている自由の燈台にならしめる力である」。⁽¹⁾ ここには世界の警察官として湾岸戦争を戦ったアメリカの使命と責任が明確かつ雄弁に語られている。なぜアメリカ人だけが地球規模の使命を担っていると強調するのだろうか、なぜ世界の模範となる務めがあるという意識をアメリカ人が持つのだろうか。常に象徴と神話を巧みに使いアメリカ人全体の統合の中心であろうとしたレーガン前大統領も、彼の演説の中で幾度となく「輝ける丘の上の町(Shining City upon a Hill)」という世界の模範たるべきアメリカ社会の姿を人々に訴えかけていた。このような強烈な自己認識の起源を探ろうとすると、それは17世紀前半にイギリスから移民してきたピューリタン・コミュニティの建設過程にその根源があるというのが従来の理解である。言うまでもなく、1630年にマサチューセッツ湾岸植民地の指導者ジョン・ウィンスロップ(John Winthrop)がアメリカ大陸に向かうアーベラ号上でおこなった有名な説教「キリスト教的慈愛のひな型」と、その中で語られた「丘の上の町」建設の訴えが根拠として取り上げられてきた。加えて、植民地建設の第二世代に属する牧師サミュエル・ダンフォース(Samuel Danforth)の説教「ニュー・イングランドの荒野への使命について

の簡潔な確認("A Brief Recognition of New England's Errand into the Wilderness")」も同様に、ニュー・イングランド初期のコミュニティーの使命感を明確にしているものと理解されてきた。しかし、はたして現代アメリカの担う使命感がニュー・イングランド初期にその起源を持つのかどうか。本論では、昨今のアメリカの学界の状況を辿りながら、これまでおこなわれてきた通説を覆す主張を取り上げまとめてみたい。

アメリカのピューリタニズムを論ずるとなると、1930年以降ハーヴァード大学で活躍したペリー・ミラーについて言及せずにはおれないだろう。ことにアメリカの担う使命感を論ずるとなると彼がこの点を決定的に強調したという経由があるので論議の出発とせざるを得ない。

ペリー・ミラーの時代、つまり1930年代当時のアメリカ文学研究の世界は、パリントン(Parrington)やメンケン(Mencken)といった批評家が中心となって反ピューリタン主義の論戦を張り、それが一世を風靡していた時期であった。ピューリタニズムという言葉は当時のアメリカ社会にとって攻撃すべきものほとんどすべてを呼ぶのに盛んに使われ、性的抑圧であれ、因襲的束縛であれ、自由を押しえつけるものすべてをピューリタニックと非難攻撃する風潮が盛んであった。政治面ではピューリタニズムは専制的寡頭政治による権威主義であると決めつけられ、それに抵抗し自由主義を標榜した者こそ真のアメリカ民主主義の礎として焦点が当てられていた。ロジャー・ウィリアムズ(Roger Williams)やアン・ハッチンソン(Anne Hutchinson)への評価がおこなわれたのはこのころで、1927年に出版されたパリントンのかの古典的著作「アメリカ思想の主流(*Main Currents in American Thought*)」をひもといてみれば、ロジャー・ウィリアムズに当てられたページ数の多さに今さらながら驚かされるのである。

そういう時にペリー・ミラーは周囲の無理解をものともせず、当時既にすべてが研究つくさされていると考えられていたピューリタン文学の研究を手掛けた。それも単に過去に於ける過去の意味ではなくピューリタニズムとア

アメリカの意義の関係、つまり過去の歴史が現在にいかなる意味を投げかけているのかを解き明かそうとしてあの *New England Mind* の二巻本を完成したのである。そして結果的には「ピューリタニズムがアメリカ人の生活と思想を連綿と貫く要素の一つであり・・・いくらかでもその理解なしにはアメリカの理解はできないと断言しうるだろう」⁽²⁾とまで言うのである。

彼の研究が様々に批判されたとき台にされるようになってかなりの時がたった。その理由には彼の扱った資料が限られていたこと、見方が一面的であったこと、アメリカの特異性を強調するあまりイギリスとの連続性を軽視し過ぎていること、ペダンチックにはしるきらいがあること、ピューリタン信仰の情動的な側面を軽視し過ぎていて、聖書的背景、神学的背景の言及が豊かでないこと、などがあげられている。しかし彼の始めた研究は現在でも実に多くの優れた研究者を排出し続けている。実際、植民地時代のアメリカを歴史、文学、宗教、そして最近では社会史から扱う研究はきわめて盛んであり、省みて日本ではその宗教的色彩が敬遠されてかややもすると脇に追いやられがちな領域であることは否めないであろう。

さてサミュエル・ダンフォースの説教「ニュー・イングランドの荒野への使命についての簡潔な確認("A Brief Recognition of New England's Errand into the Wilderness")」を考えてみよう。⁽³⁾これは新約聖書マタイ伝11章7-9節を題材にしたもので、毎年一度行われていた選挙の日(この年1670年は5月11日)に彼が読んだ説教である。端的に述べればこの説教は、「一体どのような目的を抱いて荒野に出てきたのか」と問いかけつつ、福音の宣布と神の国建設という神の期待に民衆が応えていない現状を嘆き、ニュー・イングランドに与えられた使命を再確認しようとするものである。

それに対するミラーの解釈が彼の論文集「荒野への使命」(*Errand into the Wilderness*)の巻頭を飾る同名の論文である。ちなみにこの論文は1952年5月16日にジョン・カーター・ブラウンで開催されたニュー・イングランド文書展示会の開会講演であった。その年7月7日から8月1日に彼は東京に来てい

る。戦後再開された日本におけるアメリカ研究の口火を切った東大スタンフォード大学セミナーに参加するためであった。ミラーは戦後の荒廃からやっと立ち直り、民主主義国家として復興しようとしている日本に特別な使命を感じて来日したのではないかと思う。

それはともかく、ミラーのこの論文は、"Errand" という語の持つ二つの意味を説明することから始まる。その定義は多分 *Oxford English Dictionary* から持ち出されたことが推測できるが、意味の二重性に注目するところにこの論文の妙味がある。それは(1)誰かのためにする使命なのか、(2)自分自身のためにする使命なのか、という両義性であり、簡単にいえばマサチューセッツ湾岸植民地での使命感はここに挙げた(1)から(2)に移行せざるを得なかったというのがこの論文の要点である。すなわち、マサチューセッツ湾岸植民地は初めは非分離派としてニュー・イングランドの地で会衆主義の聖書を基礎とする社会を建設し、その上でイギリス国教会の浄化(Purify)を目指していたが、1642年の清教徒革命勃発とさらに1660年の王政復古とともに、そのもとの目的は消滅し、ここで挙げられた第二の意義、すなわち自分自身のための使命を追求するほかなくなっていったことを論じた。この状況の変化の中で移民の第二世代は何のためにニュー・イングランドに居るのか、そこで何をなすべきかが曖昧になるというアイデンティティー消滅の「心配と苦悶("anxiety and torment")」に苦しまねばならず、その雰囲気の中で旧約聖書の「エレミアの嘆き」に類似した説教がなされる。それは、荒野の現実の中でピューリタンの理想がいかに変容していくかというアメリカナイゼーションの形成過程として捉えられるというのである。この論文の締めくくりの言葉は印象的である。「第一の意味での使命に失敗した彼らには、使命の第二の意味が残され、その意味を独力かつ独自に埋め合わせなければならない立場に置かれた。彼らは自分たちの丘の上の町に世界中の注目を引き付けることに失敗し、ただ一人アメリカの地に放置されたのである。」⁽⁴⁾ 言い換えれば、孤立した彼らには使命感がなければやっていけない状態に置かれたのである。

使命感がピューリタンの意識の中核をなしているとするこの見方の延長にある研究が、ハーヴァード大学において思想的にペリー・ミラーの後継者ともいふべき地位を継いだサクバン・バーコヴィッチ(Sacvan Bercovitch)によって進められた。彼は、ミラーと同様にやはり "meaning of America" をピューリタニズムに求めるが、その中でも特にピューリタンの終末論的理解 ("eschatology") がアメリカ人の意識の中核を成り立たせているととらえる。ミラーは "city upon a hill" の理想が崩れて、衰退 "decline" していく一方的な下降線そのものがアメリカ化の発生する過程ととらえている。つまり、ダンフォースの説教はアメリカがピューリタニズムに決別していくしるしであるとミラーは主張するのである。これに対して、バーコヴィッチは、ミラーの見方が常に二項対立的である限界を批判する。たしかに、教会勢力の衰退があったことは認めつつも、ダンフォースの説教においても旧約聖書の約束が成就される場こそがアメリカであると理解され、ヴィジョンとしてアメリカ観が生き延びている点を強調する。そして、このヴィジョンが、以後中産階級が中心となって生み出されるアメリカ民主主義文化の持つ、未来に対する楽観性を生み出していくと論じている。言い換えれば、ミラーはマサチューセッツ湾岸植民地が本来持っていたイギリス国教会改革の使命を失い、自らの使命に生きなければならなくなったと否定的に理解しているのに対し、バーコヴィッチはその使命への意識がアメリカの未来に対する信仰となり、社会に統一性 ("social cohesion") を与え、自己正当化の論理的基礎となっていると論ずるのである。両者の相違ははっきりしているが、しかしながらここでの論議にとって意味のある点は二人ともがピューリタンの使命感に注目し、その使命感がアメリカの根本となっていると主張するところである。

ところがこの二人の主張は実際は歴史的事実ではなく、単に後の歴史家が抱いた意識の反映にすぎないのではないか。端的にいうと指導者の指導理念は別にしても社会全体には使命感など抱いていなかったのではないか。初期のピューリタンたちの内面はもっと混乱していて、イギリスに残るか未開の

地に行くか迷っていたのではないか、ニュー・イングランドに来てもいつ本国に帰ろうかと不安に駆られていたのではないか、と考える見方が最近示されている。

まず、フィリップ・グラ(Philip Gura)はマサチューセッツ湾岸植民地の宗教的背景が単一でないことを明らかにした。ペリー・ミラーを読んでいると、あたかもニュー・イングランド・ピューリタンという架空の人物がただ一人いて、その意識がすべてであるかのような気になってしまうところがある。ところが1630年代に海を渡った人々をまとめてピューリタンというが、それは広義の意味においてであり、実は彼らはイギリス国教徒以外の多種多様な人々であった。その人々のなかには分離派もいれば再洗礼派もいる、クエーカーもいればシーカーもいたのである。こうしたラジカルな教義を守る人々がどうしてコングリゲーションリズムというニュー・イングランド独特の教会制度にまとまったのかが問われるべきだというのがグラの主張である。⁵¹

つまり、ピューリタンという言葉でさまざまな論議をおこなっているが実はニュー・イングランドのコミュニティーを形成していった人々はその一言で包括できるようなモノリシックなものではなく、多様性、異質性を広くもった人たちであったことを、まず認めなければならないことをグラは示した。確かに、あの最も古典的かつ神話的な存在として語り継がれてきたプリマス植民地の102人の分離派のなかでも40人ほどは実は部外者("Stranger")と呼ばれていた宗教的関心の薄い人たちであった。

このように視野を広げれば、ジャック・グリーン(Jack Greene)はもっと別の立場から、ニュー・イングランドのピューリタンだけがアメリカの精神を形成したというのは正しくないことを示した。大西洋岸の中部及び南部の植民地、つまりヴァージニアから、独立した自由な精神風土が醸しだされ、それがアメリカ精神を形成する大きな要素となっているはずだと主張する。この主張は同時に、ペリー・ミラーがハーヴァードで研究していたことが如実に示しているとおおり、アメリカの学問が東部のことにハーヴァード中心であったことから、意識するとしないとにかかわらず必然的に東海岸中心の視

点からのみ歴史をとらえ、中部大西洋岸や南部文化への目が開けていなかったことを示したのである。⁶⁾

なぜ、このような偏りが生じたか、この点をさきの使命感の概念形成をたどって分析したのがセオドア・ボウズマン(Theodore Bouseman)である。彼は、ミラーの "Errand into the Wilderness" が発表された1952年以来80以上にのぼる「アメリカの使命」を論じた研究を調べたあげく、それらがことごとくミラーの論文のみを根拠とし、一次資料からの新たな立論によって使命感を論じてはいないことが分かったと言うのである。たしかに、パーコヴィッチも言っているように、あのミラーの論文は書いた本人の意図とは別の所できわめて広範な影響力を持ってしまった。「端的に言うと、このことは、実質的な調査を加えずきわめて未発達の様で提案されたものが、事実として固定化され、その初めの限定された言及の範囲をはるかに越えて膨張してしまっただけの物語であるといえる」とボウズマンは述べている。⁷⁾ 彼によれば、ミラーが "errand" の意味を二つ示し、そのアンビギュイティーを論じたのに対し、後の学者たちはただ彼の論文のタイトルにある「使命」のみを強調し、それをウインスロップの「丘の上の町」の概念で補強して論じてきただけのことと言うのである。ところがそもそも「丘の上の町」という言葉はイギリスのピューリタンもよく使う常套句で、ウインスロップの説教の中心がそこに置かれているのではない。そればかりか、ウインスロップは彼らの試みの失敗を前提として話していたとボウズマンは述べている。好んで使われるようになる「丘の上の町」という言葉にしても、その後のピューリタン文学研究において最も多く引用されてきた言葉であるにもかかわらず、皮肉にも最も理解されてこなかった言葉である。彼によれば、後の学者たちが与えたような意味あい、すなわち、マサチューセッツが人類史を導く歴史的使命を担っているという論議は、ウインスロップ自身この説教以外ではどこでも取り上げていないし、他のピューリタン指導者もしていない。いくつかの説教で、模範としてのニュー・イングランド社会建設を訴える箇所があるにしても、それはイギリスでの説教にも広くあらわれるひとつのレトリックにすぎない、と述べ

ている。そして、「全人類に対してある国家が使命を帯びているという主張は、のちのアメリカ史において大きな役割を果たすことになる。しかし大移住がこの主張の最初の起点であるとするのは、ニュー・イングランド史の起源を誤解することになる」⁸⁾と彼の論文を結んでいる。

このような、いわば非神話化の傾向を一層顕著に浮き彫りにしている研究者がアンドルー・デルバンコー(Andrew Delbanco)である。彼はペリー・ミラーがアメリカの使命を主張したとされる論文を背景として、第二次世界大戦後の1951年、当時ヨーロッパにアメリカ文学を教えるため派遣されたミラー自身の経験に注目している。1952年の「アトランティック・マンスリー」誌には、「ヨーロッパで私を怒らせたこと」と題されたきわめて率直な彼のヨーロッパ経験がいらだたしい調子で描かれている。すでにアメリカでは文学者としてもっとも注目され、高い評価を欲しいままにしていたミラーが、ヨーロッパに出かけてアメリカ文学を講じようとすると、そこでは彼の期待に反して氷のような冷たい軽蔑が待っていた。なぜ、多くの犠牲のあげくファシズムからヨーロッパを救い、戦後もマーシャルプランでヨーロッパ復興のために尽力しているアメリカを軽蔑するのか。さらにアメリカ文化の代表者として送り込まれた彼に対し、なぜ冷たい扱いをして平気なのか、とミラーは函にきぬ着せぬ調子で訴える。あるヨーロッパ人が彼に対して「アメリカは歴史の中の一つの挿話であり、それも今や終わりを迎えた。今後、歴史はヨーロッパの大道の行進を再開するだろう」⁹⁾と言ったというのである。

このようにミラーが描く第二次大戦後のアメリカとヨーロッパの関係は、ちょうどピューリタンがイギリス国教会改革のため新大陸に赴いたものの、清教徒革命後のイギリスに忘れられた運命とパラレルの関係にあったとデルバンコーは指摘する。つまりミラーがマサチューセッツ湾岸植民地の「使命」を浮き彫りにしたのは、実は彼の時代のアメリカに対する意識の反映にすぎないと考えることができる。それに反して、実際のマサチューセッツの40年代の意識は、神の選びを受け使命を感じているのではなく、「友にも敵にも見放され、世界から孤立したグループとして、集団的な孤独感」であるとデ

ルバンコーは主張する。⁹⁰

また、バーコヴィッチの見解については、ベトナム戦争を戦っていたアメリカが未だジェレマイアッドの伝統を受け継いでおり、国家の失策は神からの矯正をもたらし、その意味でいまだにアメリカが神の恵みのうちにあることを示す自己擁護を言外に意味していたと指摘し、そこにアメリカの伝統的なアロガンスの根源を見ている。そして、彼はアメリカの神話としてふさわしくないために語られてこなかった事実を掘り起こしている。例えば、イギリスの内乱勃発と共にイギリスに帰る人々や、教会員となるための信仰告白ができずに悩みを深める第二世代の意識、さらに、はじめてニュー・イングランドにやってきたピューリタンの不安とユダヤ系移民の不安との共通点を見出し、移民の国アメリカにはじめて移民してきた民族としてピューリタンをとらえようとする。

現在は定説が崩れ、神話が瓦解していく時代である。ことにヴェトナム戦争後のアメリカは急激にWASP中心主義の衰退がおこり、文学史も大きな見直しが激しい勢いでなされている最中である。黒人やインディアン、日系アメリカ人など非アングロサクソン系の様々な作家が新たに注目を集め、古典とされてきた著名な作家の地盤沈下が著しい。WASP文化の根源を作ってきたとされるピューリタニズムの研究においても、その本拠地であるハーヴァード大学やニュー・イングランド東海岸での研究が、どうしてもピューリタニズム擁護の姿勢をとり、それは意識するとしなにかかわらず実は自己擁護であったことが指摘されてきた。ピューリタン研究も同様にこの見直しの潮流から自由ではいられず、今まで神話化されてこなかった、あるいは神話化にはふさわしくないとされていた事実が、これからもますます歴史からすくい出されなくてはならない。そして、他の民族が経たアメリカ移民の経験と同じ地平で比較対照できたときに、はじめてピューリタン文化の特徴とそのアメリカに与えた意味を改めて確認することができるはずである。その意味で、17世紀マサチューセッツ指導者の意識「丘の上の町」がそのままピューリタン社会全体に反映しているにとらえ、そこに現代アメリカの使命

感の起源があると直接に結び付けるのではなく、そうした学説を生みだしてきた知的、あるいはイデオロギー的背景についても見直していかなくてはならない。

注

- (1) 朝日新聞1991年1月30日夕刊。
- (2) Perry Miller, *The Puritans*, Harper Torchbooks, 1963, Vol. 1, 1.
- (3) Samuel Danforth, "A Brief Recognition of New England's Errand into the Wilderness" in A.W. Plumstead, *The Wall and the Garden*, University of Minnesota Press, 1968, 47-77.
なおこの説教の翻訳は「ピューリタニズム」アメリカ古典文庫-15, 研究社, 1976年出版, 大下尚一訳・解説, 276-298頁に所収されている。
- (4) Perry Miller, *Errand into the Wilderness*, Harvard University Press, 1956, 15.
- (5) Philip Gura, *A Glimpse of Zion's Glory: Puritan Radicalism in New England*, Wesleyan University Press, 1984.
- (6) Jack P. Greene, *Pursuits of Happiness: The Social Development of Early Modern British Colonies and the Formation of American Culture*, The University of North Carolina Press, 1988.
- (7) Theodore D. Boseman, "The Puritan's 'Errand into the Wilderness' Re-considered," *New England Quarterly*, Vol. LIX, 1986, 231-51, 233.
- (8) Theodore D. Boseman, 251.
- (9) Perry Miller, "What Drove me Crazy in Europe," *The Atlantic Monthly*, Vol. 187, March 1951, 216.
- (10) Andrew Delbanco, "The Puritan Errand Re-Viewed," *Journal of American Studies*, Vol. XVIII, 1984, 45.